

現代を「幸福に生き、死ぬ」ということ

平野啓一郎

年を取るにつれて、亡くしてしまった愛する人の数は、段々と増えてゆく。

普段は、そんなことは気にせずに生きている。当たり前のように仕事をし、食事に出かけ、友達と由なしごとを語り合う。しかし、日常生活の中には、どうしても、他の誰でもなく、あの人にこそ聴いてほしい、という出来事が起きる。たとえその相手が、今はもう死んでしまっても。亡くなった人が無性に恋しくなるのは、そういう時である。

あの人、もし今、生きていたなら？

私たちは、時々そういう埒もないことを考える。私の場合、父がそういう存在だった。

私の父は、三十六歳の時に急死している。私はその時、一歳だったから、父のことは何も覚えていない。物心ついた時から、父がいないのは当たり前だったので、それを特に悲しいと思ったことはなかった。ただ、そんなふうに、人間はある日、突然死ぬんだと思うと、ひどく不安になった。それが、私の実存感覚の根本である。

父が生きていたら、自分に果たして、どんなことを言っただろうか？——子供の頃には、実は意外と考えないことだった。むしろ、親類が、口々に私にそう言った。しかし、その三十六歳という年齢に近づくにつれ、父の心中をあれこれ想像してみる機会は多くなつた。私は、自分がその年齢を超えられないんじゃないかという気がいつもしていた。その歳か、それより前に死ぬんじゃないか？自分が親より年上になるということを、恐らくは、うまく想像できなかったからだろう。

私はそれで、自分が父の享年になる時には、今の時代を生き、死ぬということを実らねる正面から取り上げた小説を書くことと決めていた。それが、昨年二〇一一年だった。凶らずも東日本大震災の年であり、そしてまた私が初めての子供に恵まれた年でもあった。

私は、父の死というまったく私的な問題と、震災で二万人近くの人が亡くなったという問題とを、新しく生まれた小さな命の傍らで、毎日考えていた。そして、死んでしまった人が、また生き返って、遺族と再会する光景を思い描くようになった。それが、この度

刊行した小説『空白を満たしなさい』の世界観となっている。

ごく平凡なサラリーマンの土屋徹生は、ある日、遅い時間に会社から帰宅すると、呆然とする妻から、あなたは三年前に死んだはずだと告げられる。

彼は、全国で次々と生き返り始めた、「復生者」と呼ばれる人間の一人だった。

復生者たちは、当然、家族や友人たちから歓迎される。ところが、徹生の妻だけは、彼が生き返ったことに戸惑いを隠さない。

徹生はそもそも、自分が死んだという記憶がない。その彼に、妻はこう告げる。――あなた、自殺したのよ、と。

徹生には、自殺する動機などまったくなかった。彼は、その三年前、自分は確かに幸福だったはずだと思いついた。

失われた過去の空白の中から、少しずつ記憶が蘇ってくる。それにつれ、彼は自分が、自殺に見せかけて、殺されたのではないかと疑い始める。犯人の心当たりもある。その男を捜し出そうとするところから物語は始まる。……

何がこの時代の幸福なのか？ 今を生きることの何が喜びで、何が苦しみなのか？ どうして多くの日本人が、今、自らの命を絶っているのか？ そして、いずれは誰も避けることの出来ない自分の死、他人の死を、どうすれば受け容れられるのか？

そのことを、従来の古い価値観や通念から離れて一から徹底的に考え直したかった。今を生きる人が、心から信じられなければ、そんなことを書いてみても意味がない。

自分という存在を巡っては、『決壊』以後、取り組んできた「凡人」という考え方が、本作でも更に深められている。

エンターテインメント性と文学性との両立は、近年の私の課題で、読中はひたすら面白く、読後はいつまでもその余韻が消えないというのが理想だが、その成果は感じ取ってもらえるのではと期待している。初出は、漫画雑誌の『モーニング』で、アウエーの緊張感の中で、普段小説を読まない人を念頭に置いて書いたのもいい具合に作用した。

重たい内容も含んでいる。それは誰にも無関係ではない。しかし登場人物たちが、主人公だけでなく、きっと読者も支えてくれるはずである。

悲しい場面もたくさん書いたが、脱稿後、私はなぜか、晴れやか

な気持ちだった。

『決壊』を読んだ読者は、私に、これからどうやって生きていっていいのか、わからなくなったと言った。そして五年後に、この『空白を満たしなさい』を読んでもくれた人は、真反対に、今の時代を生き抜いていく気持ちになったと言ってくれた。書いてよかったと、私自身が心から思った瞬間だった。(ひらの・けいいちろう 作家)